

## 審査の結果の要旨

氏名 池田雅則

近代日本教育史は、「学制」で構想されたフォーマルな学校体系の漸次的実現として描かれるのが通例である。しかし現実には、独自のカリキュラムを持つ私塾が明治期になっても存続し、そこでの学習歴は一定の社会的評価を受けていた。本論文が主な対象とする越後粟生津村の漢学塾長善館はそうした私塾の一つであった。本論文は、近代私塾が果たした独自の役割に注目しその実態を解明することで、教育における近代の重層性を浮き彫りにした研究である。

本論文は3部12章から成る。第1部では、第1章で先行研究を検討し本研究の課題設定を行った後、第2章では統計資料を用いて明治期私塾の全国的な動向を、第3章では越後平野における私塾の状況を、フォーマルな学校との関連をも視野に入れつつ明らかにし、長善館の置かれた歴史的・地域的文脈を再構成している。第2部以下では長善館に焦点を絞って分析がなされる。第4章では、入門者のデータから長善館を支えたのが農村の地域指導者層であったことが明らかにされる。第5章では初代館主鈴木文台(1796-1870)時代の、第6章では二代目惕軒(1836-1896)時代の長善館の動向が描かれる。重点の移動はあったもののカリキュラムの枠組みは明治期に入っても漢学であり、その背後には漢学的教養への地域指導者層の期待があった。第7章では、漢詩文をやりとりするような「つきあいの文化」(辻本雅史)が地域指導者層に共有され、そうした教養は遊学においても有利に働いたことを明らかにしている。第3部では次第に浸透していくフォーマルな学校体系への長善館の対応が描かれる。第8章が対象とする1880年前後になると、高等教育機関への入学を果たそうとする門人たちの遊学を長善館は人脈面でもカリキュラム面でも積極的に支援していく。第9章では、そうした遊学者の一典型として、惕軒の次男鹿之介(1861-1887)の学習歴が活写される。その後長善館は、夭折した鹿之介に代って三男時之介(1868-1919)が三代目館主となり、漢学の他に英学や数学を取り入れて独自の中等教育カリキュラムを模索するが(第10章)、1890年代半ば以降になるとその地位は師範学校の予備門的水準に低下し、1912年の閉館に至る。ただし長善館は、漢学的教養を基盤とした地域指導者養成という役割を最後まで持ち続けた(第11章)。第12章で本研究の成果と残された課題を提示して本論文は閉じられる。

以上のように、本論文は、膨大な一次史料の解読によって、三代にわたる漢学塾のカリキュラムと、門人たちの学習歴の具体相を明らかにすることに成功している。フォーマルな学校体系とは一線を画した近代私塾の実態は、フォーマルな学校体系へのその順応の局面を含めて、近代日本教育史への新たな視点を提示するものであり、今後の教育学研究に重要な寄与をなすことが期待できる。以上により、本論文は博士(教育学)の学位論文としての水準を十分に満たしているものと評価された。